Osaka Shoin Women's University Repository

山路の露注釈（六）

西木忠一
池田良子

凡例

一、本稿は『続群書類従』巻第五百十（物語十）『山路の露』を注釈したものである。

一、『続群書類従』本は全編区切らず書き続けてあるが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。

一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。

一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。

(1) 仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。

(2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。

かほる→薫　せうと→兄人

猶　→なほ　其此　→そのころ

(3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

(4) 反復記号はもとの文字にもどした。

中々→なかなか

(5) 会話や消息の部分は「　」で示した。

一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」(主として「刊本系」)「第二類本」(主として「写本系」)の呼称は、本位田重美氏(『源氏物語外篇　山路の露第一類本第二類本』)の呼称を踏襲したものである。

一、補記の項で明示した諸作品の本文は、『新潮日本古典集成』によった。ただし、上記以外の場合はその都度出典を明記した。

十六　夕　雲

憂さもつらさもいづくをはじめと語りつくし給はん。「ただあへなく聞きなしつる心のうちは、なかなかいふべきかたなかりしを、ほど経てのちに、あやしきさまにさへ聞くことありしに、いとど心

Osaka Shoin Women's University Repository

も乱れまさりて、さだめなき世のことわりに思ひなししを、ひとかたのなげきばかりにて、朝の雨夕べの雲ともながめしは、よそふるかたの名残りもありしに、いまひとしほの思ひそへて、さらになげきふまじき心地なんせしを、また夢のやうなることをまねぶ人のありしのちは、いかでさることあらんと、とざまかうざまに夢より夢にまどひつつ、あはする折ありなんやとのみ、なげきすぐしつる心のうちを、かたはしもいかでおぼし知らざらん。思ひかね、あくがれ出づる山道の露けさを、仏神もあはれみ給ひけるにや、思ひのほかにかばかりも聞こえぬるは、かひなき命のながらへけるも、いまなんうれしき」など、すべてまねぶべくもあらずのたまひつづくるに、さすがあはれと聞き給ふふしもあれど、いひ出でんかたなくて、ただうち泣き給へるさま、おほどかにらうたげなり。

〔通釈〕

（薫は）憂さも辛さも、いったいどれからお話しはじめなさればよいのであろう。（薫は）「あなたがお亡くなりになったと聞いた時の落胆ぶりは、どう言い表わせばよいのかわからなかったが、時が過ぎてのちに、加えて入水による死であったとまで聞くことがあった時に、（私の心は）この上もなく乱れてしまって、（これも）定めないこの世のあるべき姿と思うようにしておりましたものを、ひと通りの嘆きだけで、朝の雨夕べの雲をあなたと思って眺めたのは、それらになぞらえて名残を惜しむ気持もありましたのに、いまいっそうの思いを加えて、これ以上生きながらえる気持もありませんでしたが、また夢のようなことを伝えてくれる人があった後はどうしてそんなことがあろうかと、あれやこれや夢から夢へと迷いながら、事実か否かを確かめる折があってほしいものだとばかり（願い）、嘆きつつ暮らす（私の）心の内を、せめていささかなりともなんとかしてお知りいただいておりましょうか。（私は）たえがたくなり、心ならずも出かけて来た山道の露けさを、仏神もあわれとお思いくださることでしょうか、思いのほかにこれほどまでに申し上げたのは、甲斐なき命を今日まで生きながらえて来たことが、いまこそうれしく思われます」などと、すべて真似ることもできないほどに話し続けなさるので、（浮舟は）さすがにしみじみとお聞きなさるふしもあるけれども、いい出しようもなくて、ただお泣きなさるその様子は、鷹揚でかわいらしい。

〔語釈〕

○あへなく――手の打ちようもなく。どうしようもなく。

○あやしきさま――異常な様子。ここでは浮舟の死が入水によるものであったことをいう。

○ひとかたのなげき――並み一通りの嘆き。ここでは浮舟の死を嘆くことをいう。

○よそふる――なぞらえる。

○まねぶ人――「見聞きした事柄を人に伝える人」の意。ここでは、出家した浮舟が小野に隠棲したことを伝えた人のこと。

○とざまかうざま――連語。「かう」は「かく」の音便。「あれこれ」の意。『源氏物語』には①『限りありて、とざまかうざまの後見（うしろみ）まうくるただ人は、おのづからそれにも助けられぬるを』など聞

Osaka Shoin Women's University Repository

こえたまへば……」（若菜下）②「数ならぬ身ながらも、よろづにはぐくみきこえつるを、今は何ごとをもおぼし知り、世の中のとざまかうざまのありさまをも、おぼしたどりぬべきほどに見たてまつりおきつることと、……」（夕霧）の二例が見える。

○仏神――仏と神。（補記⑥参照）

○おほどかに――おっとりとしたさまをいう。

〔補記〕

①本段には次の箇所に本文異同が見える。

(1)「憂さもつらさも」の傍線部、『日本古典全書』七「古本山路の露」（池田亀鑑校註）のみ「憂さもあはれも」とする。

(2)「世のことはりに思ひなししを」の箇所、「古本山路の露」（池田亀鑑校註）は、「世のことばかりに思ひなししを」とする。

(3)「朝の雨夕べの雲ともながめしは」の傍線部、第二類本は次のごとくである。

a＝露　b＝ながめにも

(4)「いまひとしほの思ひそへて、さらにながらふまじき心地なんせしを、また夢のやうなることを」の箇所、第二類本は「今一しほ思ひ佗て、さらに夢うつゝともわきかねて、なからふへしともおほえさりしに、またかかるあやしき夢のやうなることを」とする。

(5)「夢より夢にまどひつつ、あはする折ありなんやとのみ、なげきすぐしつる心のうちを」の傍線部、第二類本は次のごとくである。

a＝まよふにも、さりとも

b＝あらん

また、「古本山路の露」（池田亀鑑校註）では、傍線部Cを「歎き過しつ。つもる心のうちを」とする。

(6)「おぼし知らざらん」の箇所、第二類本は「おほしゝらむ」とする。

(7)「いひ出でんかたなくて」の箇所、第二類本は「いらえん方なくて」とし、「古本山路の露」は「いらへんことなくて」とする。

(8)「おほどかにらうたげなり」の箇所、第二類本は「いと哀也」とする。

②「ただあへなく聞きなしつる心のうち」について。

浮舟が死去したことを聞くに至り、落胆した薫の心のうちをいう。浮舟の死については蜻蛉の巻に語られる。入道の宮（女三の宮）病気により、病気平癒祈願のために薫は石山に参籠、その折「御庄の人など参りて、しかしかと申」し上げた。そこで薫は「大蔵の大夫」を使者にして、

昨夜のことは、などか、ここに消息して、日を延べてもさることはするものを、いと軽らかなるさまにて、急ぎせられにけると、昨夜の浮舟葬送を、なぜ自分に連絡せずに急になしたのか、せめて日を延期してでも……と伝えさせたのであった。

なお、本位田重美氏は、

薫のことばは「あへなく」から後で、「ただ」は、前文を受け

したが、また夢のようなことを伝えてくれる人があった後はとうしまうくるただ人は、おのつからそれにも助けられぬるを』など聞

Osaka Shoin Women's University Repository

て「語りつくすことができない、ただ次のようなことをかきくどくのみである」という気持を表わしているものと思われる。従ってここは地の文と見ておく方がよいであろう（『源氏物語山路の露』一五九頁）。

と解して、会話の部分から除いている。

③「あやしきさまにさへ聞くこと」について。

「おぼしあまりて」宇治へ向かった薫は、右近を召し出して、

ありけむさまもはかばかしう聞かず、なほ尽きせずあさましく、はかなければ、忌の残りもすくなくなりぬ、過ぐして、と思ひつれど、しづめあへずものしつるなり。いかなるここちにてか、はかなくなりたまひにし

と尋ねると、右近は薫の真心からの言葉にあとで問題になってもと考え、適当にとりつくろって語ることを止め、「ありしさまのこと（浮舟入水のこと）を申し上げたのであった。なお、右近のいったことが「あさましく、おぼしかけぬ筋」であったので、薫はしばらく言葉もなかった。だが、薫はその一方で女房たちの話を、

いかでさるおどろおどろしきことは思ひ立つべきぞ、いかなるさまに、この人々、もてなして言ふにかあらむ

と、どうしてわざわざ言いつくろうのであろうと疑いを抱いていて、匂宮が隠してしまったのではなかろうかとまで思うのであった。

④「朝の雨夕べの雲」について。

『文選』の「高唐賦（宋玉）に次のごとく見える。

昔者楚襄王、與二宋玉一遊二於雲夢之臺一。望二高唐之觀一。其上獨有二雲氣一。崒兮直上、忽兮改レ容。須臾之間、變化無レ窮。王問レ玉曰、此何氣也。玉對曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂二朝雲一。玉曰、昔者先王嘗遊二高唐一。怠而晝寢、夢見二一婦人一。曰、妾巫山之女也。爲二高唐之客一。聞二君遊二高唐一、願薦二枕席一。王因幸之。去而辭曰、妾在二巫山之陽、高丘之阻一。旦爲二朝雲一、暮爲二行雨一。朝朝暮暮、陽臺之下、旦朝視之如レ言。故爲立レ廟、號曰二朝雲一。

昔者楚の襄王、宋玉と雲夢の台に遊びて、高唐の観を望む。其の上に独り雲気有り。崒として直ちに上り、忽として容を改む。須臾の間に、変化すること窮まり無し。

王玉に問いて曰く、「此何の気ぞ」と。玉対えて曰く、「所謂朝雲という者なり」と。王の曰く、「何をか朝雲と謂う」と。玉が曰く、「昔者先王嘗て高唐に遊びき。怠みて昼寝ねたり。夢みるに一婦人を見る。曰く、『妾は巫山の女なり。高唐の客為り。君が高唐に遊ぶと聞く、願わくは枕席を薦めん』と。王因って幸す。去るときにして辞して曰く、『妾巫山の陽、高丘の阻に在り。旦には朝雲と為り、暮れには行雨と為る。朝朝暮暮、陽台の下にす』と。旦朝に視るに言の如し。故に為に廟を立てて、号けて朝雲と曰う」と。（藤堂明保監修　高橋忠彦訳『中国の古典23文選上』学習研究社）

Osaka Shoin Women's University Repository

⑤「夢のやうなること」について。

小野の母尼と妹尼が、「初瀬に願はべりて、詣でて帰りける道」にて浮舟を発見。浮舟は彼女たちに助けられ、

京に率てたてまつりてのちも、三月ばかりは亡き人にてなむものしたまひける

ということで、僧都が呼ばれた。僧都は

坂本にみづから下りはべりて、護身などつかうまつりしに、やうやう生き出で人となりたまへりけれど、

浮き舟が「後の世を思はむ」との願いを持ったので、僧都は「まことに出家せしめたてまつりてしにはべらむ」と薫に語った。これは夢の浮橋の巻に見える。

⑥「仏神」について。

多屋頼俊氏は『源氏物語の思想』において、『源氏物語』に見える「神仏」(八例)と「仏神」(十二例)を検討され、「両者の使用回数わ接近している」ことから、「『神』と『仏』との間にも格別差別お設けないで、崇敬の対象として同じように仰いでいた」(二〇九頁)とされ、

仏に対する読経、修法と神に対する祭祀とわ本来全く性質の異なるものであるが、一般人にとつてわ自分の願望お達成せしめられる仏と神とわ、祈願及至崇拝の対象として自然に類似視せられるようになり、そのような社会一般の共通心理から「神仏」「仏神」とゆう語が生まれて来たのであるようである(二一〇頁)。

と、語の発生について推測された。同氏の述べられるごとく、両者はほぼ同意味で使われていると考えてよい。

なお、「山路の露」第二類本は、「あくがれ出づる山道の露けさを、仏神も」を「あくがれ出づるやま路の露けさを、神仏も」とする。

⑦薫が浮舟に胸中の思いを語る章段である。

浮舟の死が入水によるものであると聞いた時の驚き、そしてその後小野に隠棲していると伝え聞いた時の戸惑いなどを語っていく。そこには生きるすべを失った薫の救いようのない悲嘆に沈む姿が見える。「朝の雨夕べの雲」を浮舟だと思って眺めていた薫のあわれさは、いかにも王朝貴族らしき姿を前面に強く押し出している。

涙がちに語り続ける薫のことばを聞く浮舟は、「さすがあはれと聞き給ふふし」もある。とはいうものの、その思いを表わす言葉もいまはない。いまの浮舟は、ただ「うち泣き給」うのみ。浮舟には、自分の運命のはかなさはいうまでもなく、薫の悲痛な思いも理解できる。だが、それゆえにこの宿世を思うと浮舟は泣いてしまうのであった。

十七　御心

「さりや、いとかくおぼし捨てたるなんつらき。昔より思ひ知りにし身なれども、深き心の色は、かうしも人はあらざりけると、我

Osaka Shoin Women's University Repository

のみ思い知らるるに、をこなる恨みも添ふにやあらん」とのたまふに、憂かりし筋のこと、少しかすめ給ふを聞くが、いみじうはづかしくて、いとどいふべき言の葉もおぼえねども、あまりおぼつかなからんも、あやしかりぬべければ、

ながらへてあるにもあらぬうつつをばただそのままの夢になしてよ

ほのかにまぎらはしたるも、昔にかはらずなつかし。よろづ思ひ知りたるしるしにや、ありしよりも、もてなし用意心にくくねびまさりにたる心地して、昔の人にもなほようおぼえたるかなと見給ふに、いとどしき御心うちなりかし。過ぎにし方の迷ひだにくやしきを、かつ見てのちも、しひて夢になさんことこそあるまじけれとて、

思ひ出でて思ふだにこそ悲しけれまたや憂かりし夢になすべきげにいと心深くおぼし入りて、おしのごひまぎらはし給へる御さまは、少し物思ひ知らん人は、あはれ見過ぐすやうはあらじかし。かの御心はた昔にかはらぬなつかしさの、忍びがたうあはれなるにも、我ならざらん人は、いとかうしも僧都のいさめにもはばからじかしと、思し続くれど、うちへだに入り給はず。さまよく寄りゐ給ひて、つきせぬことどもなつかしう語らひ給ひつつ、「なほかかる御さまなん罪得ぬべき。などか今ひとたびかはらぬさまにて、逢ひ見んとはおぼさざりける」と、さすがに引き動かし給ふも、苦しとのみ聞き給ふ。

〔通釈〕

（薫が）「本当にそうですね。このように私のことを見限って捨てたのは辛いことです。昔から充分知り尽くしていたわが身ですが、（私の）愛情の深さは、あの人（匂宮）はこうまでもなかったと、自分にはよくよくわかっているというのに、愚かな恨みも加わったのでしょうか」とおっしゃると、（浮舟は）あの嫌な（匂宮との）事をいささか聞き及んでおられることを聞くのが、ひどく恥しくて、全くいうべき言葉もない思いであるが、あまり頼りなく（黙っ）ているのも、いかにも妙な感じなので、（浮舟が）

ながらへてあるにもあらぬうつつをばただそのままの夢になしてよ

とぼんやりとまぎらわしたのも、（薫は）昔と変わらず親しみの持てることであった。何かとすべて知っている結果であろうか、あのころよりも、態度や心遣いが奥ゆかしく成長した感じがして、（たしかに）昔の人（大君）にもやはり似ていることだと（思って）ごらんなさるにつけても、（薫は）途方もないお考えであることだ。過ぎてしまったあの頃の心の迷いさえ口惜しいのに、その一方でこうして（浮舟の）姿を見た後も、強いて夢（の中で）のことにするのは決してあってはならないと（思っ）て、（薫は）

思ひ出でて思ふだにこそ悲しけれまたや憂かりし夢になすべき

本当にひどく心深く思い込みなさって、（落ちる）涙を押し拭ってまぎらわしておられる（薫の）ご様子は、いささかもののわかる人は、身にしみて見すごすことはきっとあるまい（と思われる）ことである。あの人（薫）の御心はやはりかわらないなつかしさが忍びがたく心にしみじみと感じられるのも、自分以外の人はこんなにま

Osaka Shoin Women's University Repository

で僧都のいさめに遠慮することはあるまいと、思い続けるけれども、（薫は）奥の方にさえお入りなさらない。（浮舟に）さまよくより添いなさって、尽きることのないことを親しく語りあいなさり、（薫が）「やはりこのような尼姿におなりになったのは、（かえって）罪を得るに違いありません。どうしてもう一度以前の（在俗の）ままの姿で、逢ってみようとはお思いなさらなかったのですか」と（いって）こらえきれず、（浮舟の袖を）ひき動かしなさるのを、（浮舟は）辛いことだとばかりお聞きなさる。

〔語釈〕

○さりや――「サアリヤ」の約。「ほんとうにそうだ、やはりそうだ」の意。「や」は感動の助詞。

○深き心の色――「あなたを思う愛情の深さ」とする本位田重美氏（『源氏物語山路の露』五五頁）に従ってよい。

○「ながらへて」の歌――浮舟の歌。「生きながらえているとはいえ、全く生きていることにはならない現在の生活を、そのままの夢にしてくださいという、浮舟の切ない願いが詠まれている。

○昔の人――宇治八宮の姫君（大君）のこと。（補記③参照）

○「思ひ出でて」の歌――薫の歌。「あの頃を思い出してふり返ってみるだけでも、悲しくなってしまいます。（やっと逢うことができたというのに）どうして、またつらい思いをした夢にすることができましょうか」の意。浮舟が「ただそのままの夢になしてよ」と詠じたのに対して、薫は「またや憂かりし夢になすべき」と返歌したのであった。

○僧都のいさめ――横川の僧都が浮舟に与えた文をさす。（補記④参照）

〔補記〕

①本段の本文異同、以下のごとくである。

(1)「昔より思ひ知りにし身なれども、深き心の色は、かうしも人はあらざりけると」の箇所、第二類本は「昔より人には思ひおとし給し身なりと、おもひしりにし、いふかひなさなれとも、心の色ふかきはかりは、さりとも人はかうしもあらさりけりと」とする。

(2)「をこなる恨みも添ふにやあらん」の箇所、第二類本は「をこなり、うらみこと、もこそおほすらめ」とする。

(3)「御心うちなりかし。過ぎにし方の迷ひだにくやしきを、かつ見てのちも、しひて夢になさんことこそあるまじけれとて」の箇所、第二類本は傍線部次のごとくである。

a＝御さわきを　　b＝ナシ

c＝あさましけれ

なお、「古本山路の露」（池田亀鑑校註）は、傍線部cを「めざましけれ」とする。

(4)「あはれ見過ぐすやうはあらじかし。かの御心はた昔にかはらぬなつかしさの、忍びがたうあはれなるにも」の箇所、第二類本は傍線部を

a＝み過し給はぬやうもあらん

Osaka Shoin Women's University Repository

b＝彼のこゝちにも
c＝ナシ

(5)「いとかうしも」に続けて、「古本山路の露」は「いつはらず」を挿入している。

(6)「さまよく寄りゐ給ひて」の箇所、「古本山路の露」は「さまよう寄り居給ひつ。」と、文を切る。

(7)「罪得ぬべき」の箇所、第二類本は「えみえぬへき」とする。

②「憂かりし筋のこと」について。

「憂かりし筋のこと」というのは、浮舟と匂宮との密通事件をいう。浮舟の巻に、匂宮が忍びやかに格子を叩くと、

右近聞きつけて、「誰そ」と言ふ。声づくりたまへば、あてなるしはぶきと聞き知りて、殿のおはしたるにや、と思ひて起き出でたり。

と事件当夜を語り出す。匂宮の「いとこそわりなかりつれ。まづあけよ。」という声が薫に「いとようまねび似せたまひて、忍びたれば」、右近は匂宮とは思いもかけず「かい放」ったのであった。こうして匂宮は薫に全くそっくりの様子で浮舟に近づいていく。結果、匂宮は浮舟に、

近う寄りて、御衣ども脱ぎ、馴れ顔にうち臥したまへれば、(右近)「例の御座にこそ」など言へど、ものものたまはず。御衾参りて、寝つる人々起こして、すこし退きて皆寝ぬ。

こうして、二人の密通事件は起きてしまったのであった。

③「昔の人にもなほようおぼえたるかなと見給ふ」について。

総角の巻で、「世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにものの枯れゆくやうにて消え果てたまひぬるは、いみじきわざかな」と大君の死を語っていた。その時大君二十六歳、時は冬であった。

なお、宿木の巻で「頭つき様体細やかにあてなるほどは、いとよくもの思ひ出でられぬべし。扇をつとさし隠したれば、顔は見えぬほど心もとなくて、胸うちつぶれつつ見たまふ」と、車から下りる浮舟が、亡き大君に生きうつしであったので、それを見て驚く薫が語られていた。今、薫は改めてその事実を確認したことになる。

④「僧都のいさめ」について。

横川の僧都が、薫の懇請を受けてしたためた文をいう。夢の浮橋の巻に、

今朝ここに、大将殿のものしたまひて、御ありさま尋ね問ひたまふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえはべりぬ。御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山がつのなかに出家したまへること、かへりては、仏の責め添ふべきことなるをなむ、うけたまはりおどろきはべる。いかがはせむ。もとの御契りあやまちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功徳は、はかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなむ。ことごとには、みづからさぶらひて申しはべらむ。かつがつこの小君聞こえたまひてむ。

Osaka Shoin Women's University Repository

と見えて、これがその全文であるが、僧都が浮舟に還俗を勧めたのか・否かをめぐって諸説が見える。本位田重美氏が『源氏物語山路の露』(一六〇～一六一頁)で詳細に述べておられるのでそれに譲ることにして、

僧都の文は平明によめば、女に還俗をすすめたことになる。しかし、当代の仏教で、還俗して男をもつということがありえようか、許されようか。

還俗勧奨と解しまいとして、種々むつかしい議論があるけれども、とらない。

(玉上琢弥『源氏物語評釈』第十二巻・五七四頁)

や、「もとの御契りあやまちたまはで……」に関して、「浮舟は還俗をすすめる趣旨」(新潮日本古典集成『源氏物語』八・二七二頁)と注記するごとく、僧都の文は浮舟に還俗を勧めたものと解すべきであろう。

⑤薫は、どうやら匂宮とのあのいまわしい関わりを知っているらしい。それを思うと浮舟は恥しさと辛さで言葉もない。かといってそのままでは物語の進展はなく、作者は浮舟に歌を詠じさせることで物語を進行させた。「ただそのままの夢になしてよ」という歌の下の句が彼女の本音である。彼女の本心は明白にはならないが、いまの彼女は「夢」として過ちを閉じてしまいたいという。だが、その時の浮舟が薫に亡き宇治大君を思い出させてしまう。そこで、薫は「またや憂かりし夢になすべき」と返す。こうして、この夜の二人の対面は涙の対面であった。

堪えられなくなった薫が、浮舟に「などか今ひとたびかはらぬさまにて、逢ひ見んとはおぼさざりける」というと、浮舟の袖に手を触れる。だが、いまの浮舟にはそのことさえも辛いことに思える。薫の心は理解できるものの、自分の心がそれに応じない。尼姿の彼女にはその垣を乗り越えることができないのだ。

燃え上がる薫と、それを受け止められない浮舟。いかにも合うように見えて合わない二人の心の歯車が、この場における二人の心のありようである。

十八　栴檀

ただかのむかひに、峰の松風に鹿の音響き添へたるほど、すごく聞きわたされてもの悲しきに、ながむる庭の草むらは、露のみ玉かとみがきつつ、澄み行く月は、秋を憂へ顔なる虫の声など、取り集めあはれをつくしたるところのさまなるに、世の常のまれなる中の行きあひだにも、おほかたあはれも添ひぬべきを、この世にはいかで夢にだにさだかには見がたかりし面影を、ただそれながらあひむかひ給へるあはれは、いかでなのめならん。またかかるためしあらじかしと、絶えずおしのごひ給へる御袖の匂ひ、この世のものともおぼえず。隈なき月の光に、ところがらいとどいふよしなく、なまめかしく見え給ふ。女もさこそいへ、思ひ知り給ひければ、おほかたはなつかしく、心深く語らひ給ひながら、さこそあれ、なま心きたなきかたうちまぜなどもし給はぬを、人にはことにありがたく

Osaka Shoin Women's University Repository

思ひ知られつつ、少しあはれもまさりけんかし。例の色めいたるさしすぎ人どもは、姫君のうちとけたりつる御さまを、「いかに見聞こえ給ふらん。うかりける御ことどもに、やつい給ひてしことこそ今更口惜しけれ」などいひて、そなたのとおりの御格子細めてのぞきければ、妻戸の御簾引ききておはすめり。指貫の裾ばかりほのかに見ゆるを、「いみじう艶なる御さまかな。今様の人はかうしもあらぬものを、思ひやり深き御けしきこそ」など、めでまどふも心づきなし。吹き過ぐる御追風などは、ましてうたてこの世のほかの心地こそすれ。仏のとひ給へる梅檀の薫も、今こそ思ひやらるれなど、心もそらにて、夜もすがら格子のもとに忍びたたずみつつ、「いまだそのままにてこそおはすべかめれ。あさましの御色の深さなりや」など、くちぐちささめくも、けしからぬ思ひやり心なりかし。

〔通釈〕

ほんの向かい側に、峯の松に吹き寄る風に加えて鹿の鳴き声が響いているころ、ずっと遠くに聞かれてもの悲しいのに、見渡す庭の草むらは露のみを玉かと見あやまるほどに輝きを増しては、澄み渡って行く月は、秋を憂えているような顔に鳴く虫の声など、すべてにおいて情趣を尽した様子であるのに、世の常の、稀なる仲（の二人）にも、おおかたのあわれも加わるべきであるのに、この世ではなんとしても、夢でさえはっきりとは見にくかった面影を、ただもうそのままお互いにむかいあっておられるあわれさは、どうしていい加減なことであろう。また、このような例はあるまいと（思うと流れる）涙を（薫が）何度も何度も拭いなさる時の御袖（から立つ）匂いは、この世のものとも思われず、隈のない月の光に（照らされ）、場所が場所ゆえに全くいいようもなく優美にお見えなさる。女（浮舟）も、そうはいうものの、充分ご承知であるので、おおかたは人なつかしく（思われ）、（薫と）しみじみと語り合いながら、そうではあるものの、（薫が）何とはなしに愛情に関わることをおまぜにならないのを、（浮舟には）他の人よりとりわけありがたいことに思い知られて、少しはあわれさもまさったのに違いない。あの色めかしく出すぎた人たち（尼君たち）は、姫君（浮舟）のうちとけたご様子を、「薫さまは）どのように見申し上げなさっているのでしょう。辛かったいろいろな出来事のせいで、尼姿におなりになってしまわれたことを、今こそ残念に思えることですよ」などと言って、そちら（浮舟）の方に面した御格子を細目にあげて中をのぞいてみると、（薫は）妻戸の御簾を引きかぶって坐っておいでらしく、指貫の裾だけがかすかに見えるのを、「大層優美なご様子ですこと。今ごろの（男の）人はこうではないというのに、思いやり深いご様子ですこと」などと（尼君たちは噂して）、ほめそやしているのは、どうも感心できないことである。（折から）吹き過ぎて行く追風などは、まして不気味なまでにこの世の外の心地がするのである。（尼君たちが）「仏様がお説きなさった梅檀の薫りが、今にして思いやられることですよ」などといって、心もうわの空で一晩中格子のそばにこっそりたたずんでは、「いまだにそのままでおいでのようです。へんくつなまでの愛情の深さですこと」などと、口々

Osaka Shoin Women's University Repository

にささやき合っているのも、困った思いすごしというものである。

〔語釈〕

○世の常のまれなる中――この世にはしばしば見られる、稀にしか逢うことのできない二人の仲。

○鹿の音――鹿の鳴く声。鹿は雄が雌を求めて鳴く。

○格子――寝殿造の建具の一つ。廂の間の四周の柱と柱との間ごとに用いた戸で、細い角材をすき間あらく組む。一周ごとに上下二枚とし、上は外へ釣り上げ、下は掛け金でとめて置く。末摘花の巻に「うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはさまより見たまひけり、されど、みづからは見えたまふべくもあらず」とある。

○妻戸――「十五　額髪」の語釈の項参照。

○指貫の裾――指貫は袴の一種で、裾を糸でくくって穿く。「侍童の、姿このましう、ことさらめきたる、指貫の裾露けげに、花のなかにまじりて、朝顔折りて参るほどなど、絵にかかまほしげなり」(夕顔)。

○今様の人――現代風の人。当世風の人。

○栴檀――香木の一種。(補記③参照)

○今こそ思ひやらるれ――「今にして思いやられることだ」の意。「るれ」は自発の助動詞。

〔補記〕

①本段の本文異同、以下のごとくである。

(1)「ただかのむかひに、峰の松風に」の箇所、第二類本ナシ。

(2)「なま心きたなきかたうちまぜなどもし給はぬを、人にはことに……」の傍線部、第二類本では次のごとくである。

a＝したまはす

b＝人より

(3)「うかりける御ことどもに」の箇所、第二類本は「かゝりけることゝもを」とする。

(4)「御格子細めてのぞきければ」の箇所、第二類本は「かうしほそめにあけてのそきて」とする。

(5)「吹き過ぐる御追風などは、ましてうたてこの世のほかの」の箇所、第二類本ナシ。

②「吹き過ぐる御追風」について。

薫の生まれながらにして放つ芳香については匂兵部卿の巻に

Ⓐ香のかうばしさぞ、この世の匂ひならずあやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべきここちしける。

Ⓑ……この君のは、いふよしもなき匂ひを加へ、御前の花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとの薫りは隠れて、なつかしき追風ことに、折りなしからなむまさりける。

などとかたられていて、それは異常なまでのものであった。

③「仏のとひ給へる栴檀の薫」について。

『妙法連華経薬王菩薩本事品第二十三』に、宿王華。此菩薩。成就如是。功徳智慧之力。若有人。聞是薬王菩薩本事品。能隨

Osaka Shoin Women's University Repository

喜讃善者。是人現世口中。常出青蓮華香。身毛孔中。常出牛頭梅檀之香。所得功徳。如上所説。是故宿王華。以是薬王菩薩本事品。囑累於汝。

宿王華よ。この菩薩は、かくの如き功徳・智慧の力を成就せり。若し人有りて、この薬王菩薩本事品を聞き、能く随喜して善しと讃めば、この人、現世に口の中より常に青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭梅檀の香を出さん。得る所の功徳は上に説ける所の如し。この故に、宿王華よ、この薬王菩薩本事品を以って汝に囑累す。（『法華経』（下）　坂本幸男・岩本裕訳注、岩波文庫）

と見える。なお、『源氏物語』東屋の巻に、経などを読みて、功徳のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに。仏のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などに、取り分きてのたまへる、牛頭梅檀とかや、おどろおどろしきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけり、とこそおぼゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」など言ふもあり。

と見える。その他「梅檀」の用例としては、

『宇津保物語』（俊蔭）に、

Ⓐ俊蔭七度伏し拝むに、馬走り寄ると思ふ程に、ふと鞍に乗せて、飛びに飛びて、清く涼しき林の梅檀の蔭に虎の皮を敷きて三人の人並び居て琴を弾き遊ぶ所におろしおきて、馬は消え失せぬ。

Ⓑ俊蔭この林より西にあたれる梅檀の林に移ろひて、この琴の音を試みむとて出で立つ程に、旋風出で来て三十の琴を送る。

Ⓒ一つといふ山を見れば、梅檀の木の蔭に、林に花を折り敷きて、琴を弾く人、年三十ばかりにて有り。（原田芳起校注『宇津保物語』上・角川文庫）

が見える。

④語り手の視点は本段に入って変化する。「峰の松風に鹿の音響き添へたる……」と、「あはれをつくし」た情景描写が、この場の雰囲気をひときわもり上げる。そこへ「例の色めいたるさしすぎ人ども」の登場。ここからは、この人どもの視点から主として薫のことが語られる。物語の前面に大きく登場するこの人どもに対して、薫たちは奥に小さく見えるのみ。語り手の視点は高所から見下ろす形になる。

「思ひやり深き御けしきこそ」・「あさましの御色の深さなりや」と語る彼女たちの言葉には、薫を賞賛し尽し、「いまだそのまま」の薫と浮舟に、「この期に及んでいつまでそんな他人行儀を」と、けしからぬ言葉までもつい吐いてしまう。彼女たちにもどかしさを感じさせる二人なのである。きっとこの夜も、何ごともなく明けていくに違いない。そんな二人であった。

ところで、こうした「もどかしさ」があるゆえに、当時の物語は愛読されたのではなかろうか。この段にあふれる抒情性が、この作品を支えているといえよう。